

第8回「地域教育実践交流集会」事前研修会

参加対象：地域教育実践交流集会 司会者および記録者

日 時：11月14日 in ネストホテル



① 社会教育事業の企画—「協働」プログラムのすすめ—

桐蔭横浜大学客員教授 木村 清一 氏

1 社会教育行政は時代を切り拓いた。

- ・戦争が終わり、人々は「衣」「食」「住」を求めた。
- ・ある程度生活が安定する「学び」「交流」と拠点である公民館を設置。各自体は「青年学級」を開設し青年の学習を支援し住民の要求に応えた。
- ・生涯学習時代に入り指導者の研修や住民の学習ニーズに応える事業が展開された。ボランティア養成事業も行われ、多くのボランティアが生まれる。現状を見るとボランティアは増えているが20代の参加率が低く高齢者に依存している傾向である。
- ・社会教育を取り巻く環境は厳しくなっている。社会教育の予算の削減、施設の民間委託、行政職員の削減などで、住民の学習ニーズに応える事業が少なくなっている。
- ・NPOは意欲満々だが、財政基盤が脆弱でリーダーを支える若い人が少なく高齢化の現象だが、若い人たちのNPOは活発である。

2 「協働」事業プログラムのすすめ

- ・互いの特性を尊重し、互いに助け合い、支え合い共通の課題に取り組む事業の展開が必要である。

3 協働プログラムの例

- ・行政と市民の協働

武蔵野市には公民館が無く、公設民営の「コミュニティセンター」(20)が学習や交流の拠点となっている。市民ボランティアが運営する「けやきコミュニティセンター」は、年間利用者数が6万人で、学習部グループが市民に呼びかけ自主事業を行っている。

- ・行政と大学との協働

平成15年に「武蔵野地域自由大学」が開学した。学生になると市内にある5つの大学の公開講座や科目履修生になれる。自由大学が市民と大学を結ぶ架け橋になっている。公開講座参加者や科目履修者にポイントが付き、市民準学士や修士の称号を授与し、学習を奨励している。公民館でも何か考えられないだろうか？

- ・大学と地域との協働

私が桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部で開講している「社会貢献論・サービスマニエール実習」は、講義90分15回終了後に地域の非営利団体32カ所で3時間の実習を行っています。実習先は青少年育成、障害者生活支援、国際交流、農業支援、生涯スポーツ支援など。

このプログラムに参加した学生は、コミュニケーションを図ることの大切さや社会的な課題について理解を深めている。ボランティアとして地域に関わり、青年海外協力隊を志望する学生が増

えている。

4 市民と市民の協働

12月に行われる愛媛の「地域教育実践交流集会」への参加者が多いのが注目されている。ボランティアの企画と運営がアットホームな集会となっていて肩書不要な交流ができること、実践事例発表が多く「本物」の事例に出会い学ぶことができることが特徴である。実行委員会は頻繁に行われ事前研修会も実施している例は全国にないと思う。

愛媛で行われている「学びのコミュニティ研究会」も市民と市民の協働プログラムであると思う。

終りに、市民が参加・提言する事業の構築を期待する。「公民館」は地域創造の拠点であり、学びのコミュニティづくりの拠点であると思う。多くの市民やNPOとの協働による事業展開を期待するとともに、学校支援ボランティアも学びのコミュニティづくりにとっては有益であることも知ってほしい。

「第8回地域教育実践交流集会」の成功を祈る。

② 演習「参加体験型学習の実際とファシリテーターの具体的役割」

国立教育政策研究所社会教育実践研究センター 専門調査員 糸賀 真也 氏

1 参加体験型学習とファシリテーターの役割

参加体験型学習は、参加者が主体的に学習に参加し、他者の意見や発想から“気づき”、“学び合い”ながら知識や技能を習得していく学習であり、様々な場面で取り入れられている。話し合いや相互理解を促進させたり、学習しやすい環境を整えたりすることによって、学習を支援・活性化させるのがファシリテーターである。ファシリテーターは、答えを教えるのではなく、参加者が答えを探求するプロセスを支援し目的に導く。



アイスブレイクも含め、参加体験型学習を取り入れる際には、ねらいは何か、そのねらいを達成するための手段としてどのような手法があり、アクティビティをどのように組み立てていくことがより効果的な学びの支援につながるのかということをよく考える必要がある。

2 ファシリテーションのスキル

① 場のデザインのスキル

目的、対象に応じてアクティビティ、プログラムを構成する。互いの距離、空間のデザイン、時間の管理などにも注意を払い、安心できる場・雰囲気づくりに努める。

② 対人関係のスキル

ファシリテーターがまずは自己開示をする。表情、動きなどの非言語のメッセージも受け止め、親しみやすい言動を心がける。

③ 構造化のスキル

分散から収束に向かって、様々な意見を交通整理し、議論を見える化する。論点を絞り込む重要なスキルである。

④ 合意形成のスキル

問題発見、課題の抽出、解決策など、何を目的としたワークショップかによって違いはあるが、学びを共有し、学習者の気づきや発見を整理することで、意思決定や合意形成に向かうた

めに支援することも必要となる。

また、どこで学びが成立したか、どの問いかけで参加者の姿が変わったか、つまづきの原因は何かなどを振り返り、次へと生かしていく評価の視点も重要である。

3 共感的に「聴く」こと

ファシリテーターには傾聴のスキルが重要と言われている。環境を整えること、相手の話をしっかりと受け止め適切な反応をすること、繰り返しや相づちで話し手に安心感を持たせること、相手の気持ちにより寄り添うことなどの姿勢を大切にしてほしい。

受け止め→共感→復唱→質問のサイクルを普段から意識し、テクニックから本物の共感的理解の態度を身につけてほしい。

4 やる気と可能性を引き出す質問

例えば、「どうしてそれができないのでしょうか？」と質問されるのと、「どうすればできるようになりますか？」とか「やれることは何かありませんか？」と質問されるのでは、受け取る側の気持ちも違う。肯定的な言葉、過去を責めるのではなく未来志向を心がけ、参加者のやる気と可能性を引き出すような言葉がけを意識する。

自分らしさを大切にしながら、地域教育実践交流集会での司会者としての役割を無事果たされることを期待するとともに、今後地域のファシリテーターとして活躍されることを祈念している。